



ほく-基金

これまでの軌跡

各団体の活動から

平成22年度～平成28年度



ご挨拶

皆さまには、日頃より北洋銀行をお引き立ていただき、誠にありがとうございます。
当行は、平成22年に北海道の生物多様性保全を目的とした「ほっくー基金」を設立し、希少動植物保護に取り組む人々や団体を応援しています。
「ほっくー基金」は、お客さまが「ほっくー定期預金」をお預けいただくことにより北海道の生物多様性保全に広くご参加いただけるものとなっています。これまでの贈呈先は、延べ42先4,580万円となりました。
おかげさまで、当行は平成29年8月に創立100周年を迎えることができました。これを記念して「ほっくー基金自然環境フォーラム」を開催すると同時に、これまでの「ほっくー基金」贈呈先の活動をご紹介します。また、これまでの「ほっくー基金」贈呈先の活動をご紹介します。また、これまでの「ほっくー基金」贈呈先の活動をご紹介します。また、これまでの「ほっくー基金」贈呈先の活動をご紹介します。



株式会社 北洋銀行
取締役会長 横内龍三

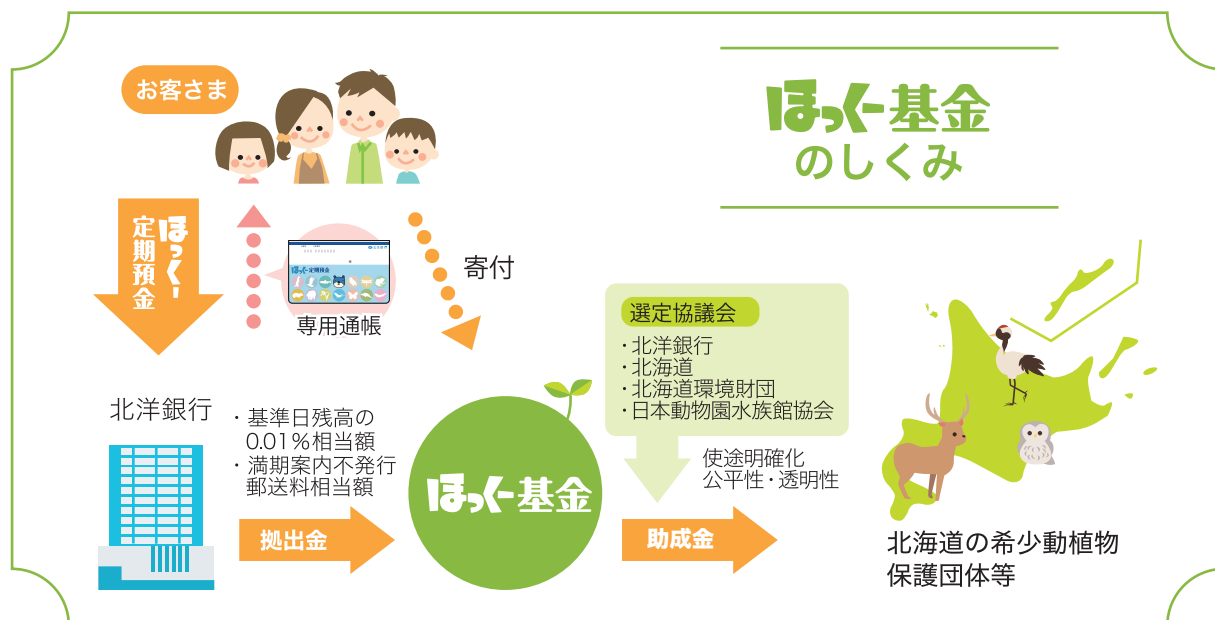
ほっくー基金とほっくー定期預金

ほっくー定期預金

「ほっくー基金」の主な原資として「ほっくー定期預金」を全店でお取り扱いしています。お客さまにお預け入れいただいた「ほっくー定期預金」の残高の0.01%相当額と、満期案内不発行による郵送料相当額を、当行が「ほっくー基金」に拠出します。これにより、お客さまは間接的に「ほっくー基金」へ参加し、北海道の生物多様性保全に貢献いただくことができます。期間1年の自動継続型定期預金で、預入金額は1,000円から、金利は店頭表示金利です。通帳は当預金専用で、「環境配慮型通帳」を採用しています。また、通帳の素材に、地球環境に配慮した紙クロスと植物由来成分のインキを使ってリサイクル適性を向上させたほか、塩化ビニールを用いない磁気テープの採用で廃棄適性も向上させています。

ほっくー基金 口座の設置

北海道の生物多様性保全に、当行の役職員はもとよりお客さまに広くご参加いただき、道民一丸となって取り組めるよう「ほっくー基金」の専用寄附口座を設け、協力金形式の募金を受け付けています。各営業店の窓口で、お振込手数料無料で受け付け、個人から法人のお客さままで広く皆さまのご協力を募っています。



平成22年度

ほくー基金の寄付先



釧路市動物園

釧路市動物園は昭和50年の開園以来、特別天然記念物タンチョウと天然記念物シマフクロウを中心とした北海道内希少鳥類の保護増殖事業に取り組んでおり、タンチョウについては保護収容された傷病野生個体の治療や野外復帰、死因究明を行っているほか、野生復帰できない個体を含む約40羽を、現在、飼育しています。

一方、シマフクロウについては平成7年に国内で初めて孵化・育雛に成功させ、さらに平成10年には人工孵化・育雛も初成功させました。このように、当園ではシマフクロウの増殖事業にも精力的に取り組んでおり、昨年までに17回繁殖、21卵を孵化させており（うち自然繁殖が15回19卵、人工孵化育雛が2回2卵）、昨年度末現在で、飼育個体を含む道内の総数約155羽のほぼ1割に当たる14羽を飼育管理しています。

このような取り組みを行っている釧路市動物園に対して、平成22年度から26年度までの5年間、ほくー基金から多大なるご支援をいただきました。平成22年度のご支援では、シマフクロウ等の希少鳥類の番い形成や個体健康管理などに用いる仮設ケージ（ほくーケージ）を整備しました。平成23年度は、保護収容タンチョウの治療に活用したほか、非公開エリアのシマフクロウ繁殖ケージに巢内監視カメラを設置しました。特にシマフクロウでは親への攪乱を最小限に抑えて産卵、抱卵、子育ての様子を監視できるようになり、今年、釧路市動物園としては7年ぶりとなる雛が野生由来のペアから誕生、巣立ちし、現在も順調に育成しています。

平成24・25年度にご支援いただいた寄付金は、主としてシマフクロウ飼育展示場の営巣木改修に活用しました。ここでは、雨漏りで巣材が濡れるなど繁殖への支障が出ていたため、腐朽した営巣樹木をFRP製の擬木に更新し、また巢内に監視カメラも設置しました。その結果、今年度に受精卵1個が産されました。この卵は親に放棄されたため、近縁のワシミミズクに托しましたが、残念ながら細菌感染が原因で孵化直前に失敗しました。

平成26年度のご支援は、タンチョウ保護増殖センター内に設置しているシマフクロウ繁殖ケージの巢内監視カメラ設置に主に活用させていただきました。ここでも、野生由来の個体で繁殖を進めており、産卵・孵化を楽しみにしています。

以上のように、ほくー基金のご支援により、釧路市動物園はタンチョウやシマフクロウ等における保護増殖事業の実績を挙げることができており、今後もこれらの成果を積み上げながら道内の希少鳥類保護に一層貢献していきたいです。



※釧路市動物園には当年度～平成26年度まで寄付させていただきました。

札幌市円山動物園

円山動物園では、平成22年度にほくー基金の支援を受け、北海道各地で動植物の保全を担う団体等の活動や当園の取り組みを紹介し、生物多様性保全の重要性を広く市民に伝える事業「2011円山動物園 北海道の生物多様性を伝えるプロジェクト」を実施しました。

内容は①エゾシカの管理と資源の有効活用を目指す取り組み、②黒松内岳ブナ林再生と、都市と農村の交流空間をつくる提案、③知床の野生生物に係る観光資源化の現状と課題、④霧多布湿原における市民らの湿原買い取り運動による保全の取り組み、⑤猛禽類野生復帰施設の活用をテーマに実施し、これらを総括して、「円山動物園生物多様性トークin地下歩行空間」を開催しました。



旭川市旭山動物園

ほっくー基金から、平成23年度に旭山動物園の「あさひやま“もっと夢”基金」に寄付されました。北海道に関連する施設で「あさひやま“もっと夢”基金」を活用したものは、北海道の鳥類や小動物を展示する北海道産動物舎、及び鳥類の飼育及び繁殖に活用する鳥類用ケージの設置があります。北海道産動物舎では北海道の猛禽類やフクロウ、小動物を展示し、来園された方に北海道の動物や鳥を間近で見ていただくことで、北海道の自然をより知っていただく施設となっており、また鳥類用ケージではオオワシ、オジロワシなどの北海道にいる猛禽類の繁殖や、保護に活用しています。



おびひろ動物園

おびひろ動物園では動物園センターロビーで、ほっくー基金を活用し、オオサンショウウオの標本を展示しています。

オオサンショウウオは世界最大の両性類で国の特別天然記念物に指定されています。

昭和40年から平成22年まで飼育しており、45年の飼育記録は国内最長記録、全長126cmは国内飼育個体では2番目の大きさでした。

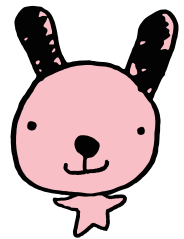
アクリル板展示ケース内で生きていた当時のまま保存しており、その大きさと迫力に来園者の視線を集めています。これからも「いきた化石」と呼ばれるオオサンショウウオを展示し、国内最長記録の飼育個体がおびひろ動物園にいたことを伝えていきたいです。



〈オオサンショウウオの液浸標本〉

平成23年度

ほっくー基金の寄付先



ユウパリコザクラの会

夕張市の財政破綻で解体の噂もあった夕張岳ヒュッテを、当会が管理を受託(平成20年6月)した後、「1口千円1万人」を広く一般へ呼びかけて建替えを計画(平成22年8月)しました。廃校した小学校の廃材を利用し、床も壁も棚も全て会員の手作り手造りで進めて3年で建替えました。そして翌年、今度は毎年仮設テントだった台所に替えて炊事棟の建設に着手しました。

これも元少年達の会員が、スコップやツルハシで基礎の穴を23個も手掘りすることから始めて、基礎のコンクリ練りから土台も柱も壁も梁も、屋根のトタン張り以外は全て会員の手作り手造りです。そして、平成29年夏から流し台の水回りを使えるようにしました。



黒松内町

北限のブナ林が代表する森林に降る雨は朱太川水系に集まり、寿都湾へと注ぎ続けます。豊かな生物多様性が維持されて海の幸、山の幸が育まれています。自然の恵みである食材を活かし、交流人口の増加による地元経済発展を目的として、新たな取り組みを始めました。

歌才自然の家レストランで「しりべしコトリアード」のメニュー化、食材の由来等を紹介するトレイシート作製の作製、什器、調理器の購入等と平行して、アコ等を使った新メニューが開発された結果、期間限定ディナー提供や秋味覚収穫祭が毎年開催されることとなりました。朱太川天然アコやモクズガニ、身近な食材を使った料理が評判となり、遠方から宿泊して参加する方々も見られます。



※このほか釧路市動物園に対し継続寄付を行いました。



北海道大学植物園

近年、人間活動や気候変動が原因で野生植物の生育環境が悪化し、生育域外保全が必要な植物種が増加しています。北海道大学植物園では、以前より北海道自生の絶滅が危惧される希少植物を栽培し、生育域外保全を積極的に行ってきました。ほくー基金により、希少植物を健全かつ集約的に管理する栽培システムの構築に取り組みました。

- 1)多くの植物種を統一した規格で植えつけ、効率的に管理する技術の整備。
- 2)栽培が困難な希少植物用に、長雨や泥跳ね等に起因する病害発生を防ぐ育成棚を開発。
- 3)生育期に継続的な施肥が必要な希少植物の管理効率を改善するための、施肥システムの改良。



〈基金により整備された北大植物園苗圃の育成棚と希少植物のヒダカソウ〉

尻別川の未来を考えるオビラメの会

「南限のイトウ」として知られるイトウ尻別川個体群(地方名オビラメ)を保全するために平成8年から活動しています。国際自然保護連合の指針に基づいて「再導入／補充」と呼ばれる手法を採用しています。ダムによる通行阻害など絶滅要因の除去を図ると同時に、尻別川固有の遺伝子を引き継ぐイトウから人工孵化で得た稚魚を元の川に戻すなどして、いったん途絶えた自然繁殖の再開を目指しています。ほくー基金を活用して、平成23年から希少な自然繁殖地での「見まもり隊」活動を継続し、平成24年には世界で初めて再導入イトウの自然繁殖を確認しました。日本ユネスコ協会連盟プロジェクト未来遺産2015採択など、高い評価を受けています。



猛禽類医学研究所

絶滅の危機に瀕した猛禽類を対象に、傷病個体の治療と野生復帰訓練の充実を図るため、医療機器の充実を行いました。また、入院動物への飼育ストレスを軽減する目的で、季節に応じて自然界で得られる餌を可能な限り入手し、動物福祉の向上を試みました。

野生動物の死亡・傷病原因を解明し、自然界に存在する原因を排除する「環境治療」の一環として、交通事故防止用のガードロープや感電事故防止用のバードチェッカーの開発を、終生飼育動物を活用した効果検証を行いながら実施しました。先天性疾患により野生復帰が困難なシマフクロウとともに、環境イベントや授業に参加し、野生動物の現状や保全の取り組みを紹介する環境教育を行いました。



NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

平成17年度から国立公園内特別保護地区である豊富町稚咲内で砂丘林再生の取り組みを行っています。当地区の一部で過去の牛の放牧や強い海風により、約3haの砂丘林が裸地化したため、原地産ミズナラを種子から苗木まで育て、植樹する活動を実施しています。平成25年にほくー基金の贈呈を受け、新たな植栽地の造成に向けて植樹計画の作成・雑草木の刈り取り・耕耘作業などを行い、同年の秋には地域の方々や子どもたちに参加いただき411本の苗木を植樹することができました。現在苗木は50cmも成長したものがあほ順調に生育しています。また植樹計画も見直しを図り、5か年計画となったことで更なる新たな裸地で植樹活動を展開しています。



辻井達一ラムサール湿地基金

公益財団法人北海道環境財団の初代理事長である辻井達一先生は、不毛の大地と言われてきた湿地の価値を見直し、多くの湿地のラムサール条約への登録を推進するなど、国内のみならず世界的にも湿地環境の保全に尽力されました。残念ながら平成25年1月に病気のためご逝去されましたが、その精神は様々な方々に引き継がれ、現在も湿地の保全活動は活発に行われています。当財団では、そのご遺志を引き継ぎ、ラムサール条約が提唱する三つの柱「保全・再生」「ワイズユース」「交流・学習」を行う活動を支援するため『辻井達一ラムサール湿地基金』を立ち上げました。現在、基金造成のため、広く企業、個人等の皆さまからご支援を募っています。



〈北洋銀行が平成24年6月に行った辻井先生と行く、釧路湿地で生物多様性を感じるバスツアーで説明する辻井先生〉

※このほか釧路市動物園に対し継続寄付を行いました。

平成25年度

ほくー基金の寄付先



北海道ウチダザリガニ防除ネットワーク

特定外来生物ウチダザリガニは、全道各地の河川湖沼などで生息が確認されています。防除は市民ボランティアを中心に活発に行われており、防除団体同士の連携を深め、難しいといわれる外来生物防除を継続的に活発化させることを目的に、北海道ウチダザリガニ防除ネットワークは活動しています。これまで各地の防除活動に参画し、通信紙の発行や、講座資料・標本などを詰め込んだトランクキットの作製、ユニフォームとしてのザリガニTシャツの配付などを行ってきました。昨年11月には「外来ざりがににサミット」を開催、全道のウチダバスターズが集結しました。これからも「無理なく楽しく、でも真剣に」をモットーに活動する決意です。



アポイ岳ファンクラブ

「アポイドリームプロジェクト」

アポイは昔より多くの人々に愛されてきた山ですが、国の特別天然記念物に指定されている高山植物群落は、盗掘やエゾシカの食害、温暖化が原因と思われる急激な環境の変化により激減の一途を辿っています。アポイ岳ファンクラブは行政や研究者、企業等からの支援を受け、地元の中学生と共に「アポイドリームプロジェクト」と称する高山植物の再生実験活動に取り組んでいます。ほくー基金はそうした活動の資金として活用させていただいています。アポイの花が絶滅することのないよう、今後も様々な機関と連携し、研究者の指導のもと、この取り組みを進めていきたいと考えています。



NPO 法人えんの森

寄付金を活用して、釧路管内浜中町と根室管内別海町の境界を流れる三郎川の取水堰にある「手づくり魚道」を補修しました。魚道は平成20年、魚類の遡上環境の改善へ向けて流域住民や地元NPO、農業団体などが「魚道設置委員会」を立ち上げて、コミュニティーワークで設置した河川施設です。現在は「えんの森」が同委員会事務局となって維持管理していますが、平成25年の集中豪雨で損壊しました。平成26年9月、約50人が参加して補修を実施し、魚道の機能が回復しました。

えんの森ではこのほか「はまなか農地・水保全協議会」の事務局として土砂緩止林の植樹の準備などを手がけ、旧保育所施設を活用した住民交流事業も行っています。



〈平成26年9月実施の「手づくり魚道」の補修作業〉

北海道生物多様性保全活動連携支援センター(HoBiCC)

北海道の豊かな生物多様性の保全に貢献するため、平成26年4月に設立された北海道生物多様性保全活動連携支援センター(HoBiCC)は、設立記念フォーラムや様々な主体との連携によるヒグマ、エゾシカ、外来種、野生サケ等の多様なテーマのシンポジウム・セミナー等を開催するとともに、WEBサイトの開設、広報資材の作成等を行いました。また、市民参加による外来種駆除活動の支援として、外来種目撃駆除情報共有サイト「セイヨウ情勢」の運営を開発運用していた東京大学から引き継ぐ(現在は運用していません)とともに、市民参加駆除イベントの開催支援、後志地域生物多様性協議会主催の市民交流会への講師派遣等を行いました。

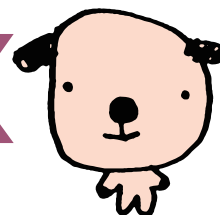
※HoBiCC WEB サイト:<http://www.heco-spc.or.jp/HoBiCC/index.html>



※このほか一般社団法人湿原研究所への寄付と釧路市動物園に対し継続寄付を行いました。

平成26年度

ほくー基金の寄付先



NPO 法人エトピリカ基金

エトピリカ基金は絶滅危惧種であるエトピリカの浜中町での繁殖地復活が最大の目標です。旧繁殖地がある海に誘致する手段として当NPOが開発した海上デコイを浮かべています。このデコイにエトピリカが接近する姿が見られ一定の有効性が証明されていますが、波等によりデコイや設置用具のアンカーなど毎年数基が喪失したり破損がありました。ほくー基金の支援により海上デコイを新たに10組製作し、アンカーやロープの消耗品を合わせて購入し本年も活用しています。また海水温上昇など海の環境が変わりつつあり、海鳥や海獣の繁殖や洋上分布が変化しています。その状況を記録し後世に残していくためのモニタリング実施の船代として活用しました。



〈海上デコイ設置光景〉

北海道自然史研究会

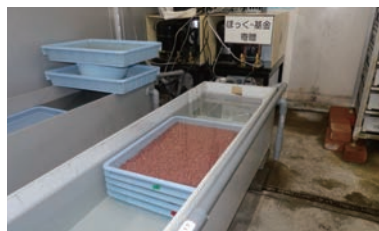
北海道内の自然史系博物館のネットワークを活かし、北海道の生物多様性や希少種の大切さについて道民に広く普及し、その保全につなげるような教材「海岸漂着物トランクキット」を製作しました。

キットでは、北海道の海岸に漂着する生物を「暖流系・寒流系」に大きく分け、その形態をじっくり観察できる樹脂封入標本やプラスチック標本を製作しました。このキットを道内の博物館での企画展示に活用したほか、環境学習に用いることが出来る貸し出し用キットとして北海道博物館で管理しています。キットにはアオイガイやオウムガイの軟体部など計21点の標本が専用ケースに収められています。



札幌ワイルドサーモンプロジェクト

カムバックサーモン運動で復活した豊平川のサケは、今では自然産卵由来の野生魚が増えました。サケの将来のためには、野生魚を保全することが必要と考えています。遡上数に応じて放流数を増減させる順応的管理を導入し、標識を付けた放流魚をモニタリングすることにより、豊平川のサケの野性味を向上させることを目指しています。ほくー基金の寄付金より水槽用冷却装置とポンプを購入し、平成28年より放流魚に耳石温度標識を付けています。また、ドライスーツを購入し、野生魚のモニタリング調査や融雪出水時の稚魚調査が可能となりました。さらに、SWSPビブスを作成し、出前授業やイベント出展時に市民への普及活動で活用しています。



第5回国際野生動物管理学会

平成27年7月に札幌にて第5回国際野生動物管理学会(5th International Wildlife Management Congress)が開催され、40カ国より1,400名の参加者が集いました。中高校生の参画が困難である国際会議にほく一基金の寄付により、中高校生向けのセッションとして「Passionate Youth: Be a Wildlifer! Messages from Wildlifers around the World 野生動物学を目指せ世界の研究者よりメッセージ」を実施しました。

中高校生130名、引率教員など32名が参加し大盛況でした。カナダ、イギリス、日本を代表する研究者から、夢を持って野生動物保全活動が続けてほしいと熱いメッセージがあり、その後、高校生はポスター発表にて様々な研究者と意見交換し、既存の学会の枠を超えた素晴らしいセッションを開催できました。



岨山自然保護協議会

岨山の入山制限が始まって19年目になりますが、植生の回復状況等を確認してもらうために毎年、少人数によるモニター登山会を開催しています。

寄付金は登山会のために行う林道整備や高山植物保護のための巡視活動及び林道ゲートの確認作業並びに外来植物駆除等のために有効に使っています。来年は岨山自然保護協議会が設立されて20周年を迎えることから寄付金を活用してフォーラムの開催を予定しており、岨山の自然保護の取り組みについて広く周知をしていきたいと考えています。

岨山の貴重な高山植物を後世に残していくために日々努力を重ねていますが、このような取り組みが他の地域においても広がっていくことを切に願います。



〈モニター登山参加者による外来種駆除の様子〉

北海道生物多様性保全活動連携支援センター(HoBiCC)

平成27年度は、外来種対策の一環として、特定外来生物に指定されているセイヨウオオマルハナバチの駆除等対策を推進するために、北海道セイヨウオオマルハナバチ対策推進協議会を立ち上げ、その事務局を担いました。セイヨウオオマルハナバチや外来種問題への理解促進を図る機会として、札幌・石狩・恵庭において駆除体験会を開催するとともに、市民の取り組みの重要性や道内の取組事例を知る機会として、シンポジウムを開催しました。また、駆除会等で活用できる実物標本や資料をパッケージした啓発用資材「セイヨウオオマルハナバチトランクキット」を作成し、札幌駅前通地下歩行空間で開催した取組報告会で活用しました。



※このほか釧路市動物園に対し継続寄付を行いました。

平成27年度

ほく一基金の寄付先



「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会

天売島は約100万羽の海鳥が繁殖する海鳥の楽園ですが、近年ノラネコが増加したことで、海鳥の繁殖に影響を及ぼしています。またノラネコの増加は住民生活への影響の他、冬の風雪で短寿命となるなどネコ自身への影響も出ており、関係団体で協議会を設置し、人と海鳥と猫が共生する天売島を目指し取り組みを進めています。

同協議会では「天売猫方式」により約100匹の天売猫の譲渡を行っています。また本基金を活用し天売猫の取り組みや飼育猫の適正飼養促進などを紹介する「天売猫だより」を作成し島民などに周知啓発を行っています。結果ノラネコは10匹前後まで減少し、ウミネコの大規模な繁殖が確認されるなど、少しずつ成果が出ています。



NPO 法人カラカネイトンボを守る会 ―あいあい自然ネットワーク―

僅かに残された石狩湿原の自然を保全し、次の世代の子ども達に残すことを目的に活動しています。篠路福移湿原の観察会や昆虫採集教室などの自然とのふれあい活動と、ビオトープ整備、トンネウス沼の浚渫作業などの保全活動を行っています。さらに、ご支援によって、実際に田んぼを借用し、5月は泥んこだらけになっての田植え、7月にはアマガエルの声を聞きながらの生き物探し、9月下旬には赤とんぼが飛び交う中での稲刈りを行っています。日本の古式ゆかしい水田文化の伝承のため、豊作祈願、田植え歌を流し、早乙女による植え付け、早乙女衣装の試着、おにぎり作りや餅つきも行っています。人と湿原が融合して共存できる社会を目指したいです。



日本鳥学会

学術研究を通して鳥類保全に貢献し続けている日本鳥学会にとって、将来を担う若手の育成は大きな課題です。札幌市で開催した日本鳥学会2016年度大会では、高校生を対象とした様々なプログラムを企画し、参加校への交通費と宿泊費補助を実施しました。その結果、小中学生も含む52名の参加者による19件の研究成果発表がありました。審査の結果、宮島沼に渡来するマガンの個体数変動原因を探った北海道滝川高等学校が最優秀賞に選出されました。また、先輩研究者が熱く語りかけた企画集会「鳥学のススメ〜研究の魅力と鳥系キャリア」、北海道大学で鳥学を学べる研究室訪問、ウトナイ湖での野外研修も実施することができました。



エゾシカ食肉事業協同組合

当組合は道内に100以上存在すると言われているエゾシカ食肉処理場の中で、「北海道HACCP」の評価を受け、「北海道エゾシカ衛生処理施設認証」を受けている事業所が中心となって組織するエゾシカ食肉事業者の組合です。この度拝領した寄付金を活用させていただき、当組織の生命線である「衛生管理」をより一層徹底するため全道の組合員を根室市民会館に招集しての「エゾシカ衛生処理講習会」を開催出来ました。エゾシカの病理検査に関する指導を獣医師協議会所属獣医師の先生に指導いただき、大変有意義な講習会となりました。また、東京での商談会に参加し、新規顧客獲得と道産シカ肉の周知活動に役立てた事は大変ありがたかったです。



公益財団法人知床財団

知床国立公園内にある知床自然センターと羅臼ビジターセンターにおいて、楽しみながら自然や野生動物について学ぶことができる環境教育プログラムとして知床財団職員による20分ほどのミニ・トークや館内の展示を利用したレクチャーを実施しました。いずれも知床の魅力や課題についてより深くお伝えすることを目的とするとともに、野外での活動の際の留意点などにも触れ、知床を安全に楽しんでいただくための情報提供に努めました。平成28年4月から平成29年5月までの期間中、2施設合計618回の各種レクチャーを実施し、4,769名の方にご参加いただきました。また、同年2月に知床自然センター館内に6種類ある「柱展示」のうち2種類の柱展示の全面リニューアルを行いました。



大沼ラムサール協議会

平成24年にラムサール条約湿地に登録されて以来、大沼ラムサール協議会では、大沼の環境保全や情報発信を進めてきました。特に平成28年は、北海道新幹線の開業もあり、多くの国内外の観光客が訪れるようになりました。その中で、環境に対する配慮や意識啓発を地域全体で進めることが必要と考えられました。そこで、子どもたちが環境を守る大沼ラムサール隊の活動に加えて、ウシガエルなどの外来生物と生物多様性についての勉強会や、外国人ボランティアとの意見交換会などを行うことができました。また、東京大学や大阪大学などの協力も得て、今後の大沼流域の未来を考えるフューチャーデザインのワークショップを開くなど、住民との活動も活発化しました。



山歩集団青い山脈

三方を海に囲まれた松前半島の大千軒岳を母山とし、自然環境保全活動を続けている当山岳会にとって、登山コース案内標識の維持保全は重要な事業です。殊に、腐朽倒壊した山頂標識の再建計画で、工事財源の見通しが立たずにいた時、ほくー基金の対象団体に選ばれました。関係機関・団体の支援とボランティア団体の協力を得て、工事は平成28年8月「山の日」に竣工式を行うことができました。多くの人々の善意に支えられ、厳然と建てられた山頂標識を背景に、今年も初級登山者の育成や登山者の安全、希少種保護や自然観察など、生物多様性保全活動をめざす会員たちのパトロール活動が力強く続けられているところです。



平成28年度 ほくー基金の寄付先

(平成28年度の寄付による活動は進行中です。)



公益財団法人日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ

現在タンチョウ保護の課題となっている越冬期給餌場周辺の集中・過密化による伝染病蔓延などのリスク軽減のために、平成20年以降の重点事業として整備した「タンチョウの冬期自然採食地」。現在鶴居村内に15か所ある冬期自然採食地の維持管理のための資材や、タンチョウの利用状況を調査するためのタイマーカメラなどの機材を購入しました。また開設30周年を記念して、今後道央圏に自然分散していくタンチョウが地域社会と共生していくための課題や解決に向けた取り組みについて考える、平成30年1月に札幌で行われるタンチョウシンポジウムの開催費とさせていただきます。



〈日本製紙クレインズ選手と子ども達の自然採食地整備・平成29年7月8日〉

NPO法人シマフクロウ・エイド

30年にわたる国や研究者の保護対策によって絶滅寸前だった70羽から140羽まで漸増したシマフクロウ。個体の増殖に力を入れた対策から、今後は生息環境の保全が重要視されています。当NPOでは今まで明らかにされていない保護の重要な取り組みの一つである補助給餌の実態を正確に把握する初の調査の精度向上のため当基金で新たな記録用機器を設置しました。データの記録等作業効率向上につながり現在も続行中です。この成果は、本種の安定した生息環境の確保に向けた適切な保護対策を行うための基礎材料として活用します。さらにスライドトーク等の開催で成果還元、課題の共有で、生態に影響を与えず普及啓発を推進します。



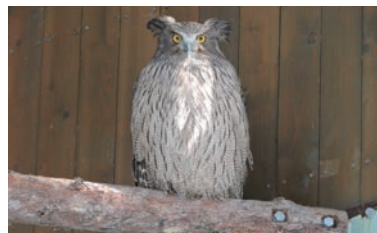
札幌市円山動物園

円山動物園では、平成26年より、北海道の代表的な絶滅危惧種であるシマフクロウの飼育下繁殖に取り組んでいます。

未だ繁殖には至っていませんが、今冬は初めての交尾や営巣行動なども確認され、今後の期待が高まっているところです。

今回、ほっくー基金からの支援により、シマフクロウの行動観察用のカメラシステムの増設・更新を行わせていただくこととなりました。

夜行性のシマフクロウの夜間の繁殖行動の様子をこれまで以上にきめ細かくチェックしていくことで、今後の繁殖に向けた適切なサポートを行っていくことができるようになると思われます。取り付け工事等はシマフクロウへの影響が最も少ないと思われる9月頃(執筆当時)を予定しています。



NPO法人近自然森づくり協会

アイヌ民族とその文化を育んだ「イウォロ」と呼ばれる伝統的な生活空間が注目され、再生に向けた取り組みが開始されています。これには、多様な在来種の森の再生が必要であり、当協会が開発、導入してきた「生態学的混播・混植法」による生物多様性の高い樹林の再生と、馬搬を用いて既存林の持続的利用を図る「近自然森づくり」が適すると考えられました。そこで、地元産の種の採取・播種・ポットへの植え替え作業を開始すると同時に、植栽予定地に防草シートを敷設し、植栽する小苗を被圧する草本の抑制を開始しました。また、フットパスを設けるため、障害となる樹木を伐採し、林地を傷つけない馬搬による木材の搬出を冬に計画しています。



駒生川に魚道をつくる会

農地開発を目的に駒生川はコンクリートで固められ、落差工と呼ばれる段差が造られました。その結果、川に生息する様々な生き物は姿を消し、産卵のために海から川に戻ってくるサケ等にも影響を与えました。「このままではサケが可哀そうだ」その一言に多くの人が共感し、魚道づくりが始まりました。

私たちは、丸太や石など地域にある材料を使って、魚道を完成させました。すると、魚は次々と段差を越えていき、今では、多くの魚が駒生川に暮らしています。こうした手作りの魚道は、地域の自然を甦らせることができます。今後は、誰でも魚道づくりに取り組めるよう、私たちの手法を紹介したいです。また、魚道を維持し、その効果を調べていきたいです。



北海道外来カエル対策ネットワーク

北海道、札幌市、石狩市、(公財)札幌市公園緑化協会、NPO法人EnVision環境保全事務所、酪農学園大学の6団体が構成する「北海道外来カエル対策ネットワーク」では、石狩市、札幌市、洞爺湖町などで外来カエルの勉強会や講習会を実施しています。これまで約300名の市民が参加し、北海道の外来カエル問題や他の外来種について幅広く普及啓発してきました。外来種問題が身近なものであることを地域に伝え、今後の外来カエルの拡散を予防・監視する市民を増やすことができました。さらに、外来カエルの防除とその技術開発を目的として、石狩市名無沼にてアズマヒキガエルの防除柵を設置するなど、外来カエルの防除対策モデル事業を展開しています。



ノシャップ寒流水族館

当館が取り進めている事業は、地域への貢献を目的に稚内漁業協同組合と連携しニシンの人工孵化・育成放流を行い、将来的にニシンの回帰を目指し水産資源の回復を図ることです。既存の箱型水槽は育成に適したものとはいえず、稚魚が回遊する際に水槽壁に衝突をして奇形となり死滅する確率が高いです。そこで、生存率を上げるために平成29年8月までに稚魚が回遊しやすくなる丸型的水槽を設置し、平成30年5月頃に稚内漁業協同組合から提供されるマブシ（人口産卵基質）を用いた孵化に備えます。また、同時に培養水槽を設置し、ニシンの餌料を安定供給することで、生存率の更なる増加を目指します。



一般社団法人エゾシカ協会

当協会が目指しているエゾシカの「資源管理」を実現するため、エゾシカの資源的価値を高め、食肉利用率を上げるための取り組みを実施する予定です。野生動物であるシカの肉に関する基礎的な情報が不足していることから、まず性別や年齢、季節によるシカ肉の特性を明らかにします。さらに、解体処理場から離れた森の奥深くで捕獲されたシカの肉も利用できるように、衛生的に一次処理が可能な「小型一次処理車」の導入に向けた基礎調査を実施します。また、シカ肉を衛生的に扱える人材の育成が重要であることから、シカの資源化率がほぼ100%であるイギリスと情報交換し、連携を強化します。



知床ウトロ海域環境保全協議会

世界自然遺産・知床のウトロにおいて絶滅危惧種の海鳥ケイマフリをシンボルに、海域の環境保全と適正利用、さらには地域協働による活動を通して人々の繋がりを育て、自然も人も豊かになるWin-Winの仕組みと関係づくりを目指した取り組みを行っています。

本年7月後半に開催した海鳥ウィークでは、ホテルや観光船事業者の協力のもと、観光客に海鳥の生態と海の環境保全をテーマに解説する普及啓発を実施しました。今後はケイマフリの繁殖数を回復させるため、巣箱の設置とともに生態の調査も進めていくこととしています。



HOKUYOファミリー ほくーと仲間たち

